

このものもん

句集

中川句寿夫

智の峯

甚平也

朝刊

2020年



句集 このもん

目次

俳句……………中川句寿夫 7

中川句寿夫さん……………定樞じょう 192

無花果を採らんと女木に登る

住職の漢方談義やくわりん酒

一本は庭にさし込む稲架支へ

奥能登の苗代荒れの続きけり

酒提げて来て屋根替を手伝へり

人先に耕し終へる習ひにて

新涼やネクタイしめて人に会ふ

売菓の一夜の宿やとろろ汁

一合の寝酒賜る良夜かな

新藁の穂もて作りし筥かな

鳥渡る村を輪島のお膳売り

添木せし大自然薯を贈りけり

梯子かけてゆがむ庇や黍を干す

大往生遂げし四温にめぐまれて

板垣の釘のゆるみや春隣

白エプロンの飯たき婆や親鸞忌

落葉して炭焼く道へ細るなり

かさね着をして出てゆきぬ田植荒れ

春昼を尋ねし留守の時計鳴る

針買ひて女世帯の冬支度

出来秋の米で買ひたる内証もの



竹藪に日輪淡し穴まどひ

炉灰より諸抜き出してくれにけり

炭がまに忌明けの塩を振って入る

酒好きの呑めばけろりと治る風邪

漆搔く六尺程の竹梯子

朝市に売る楽しみの大根洗ふ

藁仕事持ち寄る浦は荒れ続き

かいば桶浸してありぬ紅葉川

短日の海女町で買ふ糠鱒

ぜんざいも出て分校の雪下し

茎立ちのやはらかければ摘み帰る

樽りや鍬の柄仕込む朝餉前

初霰牛買いひが来て納屋覗く

竹藪の中の薪棚日脚伸ぶ

代掻いて来て不機嫌に疲れをり

雪の戸を余さず廻る刃物売り

檜炭の俵の蓋は檜の枝

日向ぼこ大事な用を忘れをり

石垣の潮じめりして石落咲けり

刈つてある畦一筋や盆の道

米蔵に隣る味噌蔵額の花

あぢさみの花稚くて葉の色に

怒鳴られてみて恙なし去年今年

井戸蓋に栗干してあり流人里

雪囲ひ解けば夕日がまともにて

一竿に満たず大根干してあり

山峡のまだ明けきらぬ貝割菜

群がって一本づつの曼珠沙華

家々へ土橋のかかる薄暑かな

諸の芽のまだ出ぬところどころかな

代を搔く土飴色に変はるまで

蛙いま呑まるところ見てしまふ

声がしたやうで筍置いてあり

青芝に濃淡のあり起伏あり

兎罫仕掛けほどよき雪が降る

癌のこと話してをりぬ日向ぼこ

春の雪善意の傘を借りてくる

甚平や死に損なうてをると言ふ

布団干す漢のうしろ通りけり

朝刊が来てそれから雪の嵩

鶯餅つかみどころのありにけり

河骨の花見るただそれだけの用

今週は紫陽花ばかり描いて雨

老鶯や日柄選んで形見分け

炎天を来て先づ尿を採られけり

ないないにしてをく話菜を間引く

出穂はや倒伏ところどころかな

町薄暑提灯張り替致します



八月も終る田回りして来たる

花冷を籠りて居れば救急車

代筆の礼と思しき茄子トマト

白玉を貝の器に辻地蔵

塩汁に岩海苔さつとくぐらせて

鱚雲能登も広しと思ひけり

小鳥来る母に手頃な箕が一つ

箒草干して束ねるだけのこと

不作田に追ひうちの雨降つてをり

寒鯉のゆらりと水に戻さるる

身を細う細うして秋の蛇なりき

一本梯子登りつめたり枝を打つ

木の実独楽話の要外さるる

菊を見て帰り孫の手妻に買ふ

盆過ぎて親しくなりぬ杉木立

井戸替への二連梯子を差し降ろす

おっとりとしてみて水は盗むもの

夏落葉意外な嵩を掃きよせて

梅雨の妻意外なことを聞いてくる

梅雨入前土間あつさりとしてをきぬ

38

麦秋の白布巻かれて床柱

時の日のあるだけの鎌出して研ぐ

地下足袋の靴きつちり花石榴

39

鱚雲本気で子等を叱りをり

南天の実にすきすきの囲ひして

あまめはぎ見て来て傘のしづくきる

冬耕の明るき方へ方へ雲

屋根替へを今年本気で考へる

代掻きに何が降るやも知れぬ沖

傍目にはどれも見劣りせぬ青田

春待つやぬくめて使ふボールペン

初蝶や葉で顔のほてる日の

休暇明けやさしくなりぬ仁王の眼

自分のことは自分で酒をあたくめる

葺山解かれ五重塔が見え

磊落でまだ刈る稲を持ってをり

鍬形にかまれし声をあげにけり

とろろ汁他人行儀なことを言ふ

ふぐ食うてどこまで白を切るつもり

甚平やわたくしごとで恐縮す



花櫛分家が仕切る本家の葬

親猫も一緒に捨ててゆきにけり

雪を搔いてをり相撲見る時間まで

水仙の喇叭のなかのうすみどり

木を伐って瀧を裸にしてありぬ

海老根群生告げやうか告げまいか



炎天を無駄足踏んで帰りけり

不貞寝してをり扇風機強にして

階段のしたへ納まる扇風機

海へ出て網目ほぐるる鱗雲

鶯が啼く縹渺として数へ年

朴の芽がほぐるる童話読むやうに

ただよへるもの白壁の今年竹

稲雀五重塔が見ゆるかな

秋蝶やものみな揺れてゐる日なり

秋愁や広貫堂の置きぐすり

色足袋や生涯妻のここのもん

着ぶくれて何があつても驚かず

父看取る更に遠くの夕蛙

豌豆の花に風ある月夜かな

竹林に入りて万の目しじみ蝶

蓬大福たつぷりとある持ち時間

金槌を借りに来てゐる朝曇

採血をして来てセルに着替へけり

下駄箱の上に鍵束走り梅雨

雪解川自足の母に音立てて

秋燕動かぬ山を縦横に

新涼の群を離れて真鯉かな

入り母屋の反りの深きに囀れり

風鈴を吊り替ふ東京物語

冷房や膝叩かれて異常なし

夏痩せて耳の奥まで診られけり

ひと言が多くて冬の金魚かな

催促状菊もさかりを過ぎにけり

納豆を寝かせて人を信じけり

御院主の部屋で見しこと籠婦人

片蔭を帰り下剤の効いて来し

菜虫採る消印有効明日まで

かんばせのまだ病み上りうなぎの日

井戸替の井戸の深さが自慢かな

夏果ての仁王はうしろ見せざりき

一度手を通したただけの二重廻

葉牡丹や今鍵かけて出るところ

餅のかびけづりかかはりもうもたぬ

布団干しだれにも会ひたくない日なり

蜥蜴出づ板戸の棧のあはひより

応分の寄付を乞はるる桃の花

泥鰯掘りをれば尼さま通りけり

寒卵貰ひし礼を通夜で言ふ

男爵といふ大そうないもの種

老人を説得にゆく冬雲雀

ふるさとはあるにはありぬ榎櫃の実

菊を焚きださずじまひの請求書

墓出でて家族のことをきかれけり



目隠しといふ垣のあり繕ひぬ

溝浚へすみたる町の掲示板

墨すつて指よごしたる残暑かな

井戸替への段取は寝て考へる

田仕舞の煙の中より速夜僧

稽古笛棚田の穂肥よく効いて

青田褒め話したきことほかにあり

井戸替への浄めの風呂が沸いてをり

66

郭公や鋸の目立をしてをりぬ

筍の背丈越したる習ひごと

みみ寄りな話八十八夜寒

67

鱚雲布団干したる後の用

秋日傘法事を決めて帰りけり

残る虫捕鯨絵巻の奥の院

雁や昨日法事の七つ菓子

れんこんに穴あることの不安かな

湯ざめして何をいひだすやも知れず

人のすることをよく見て種茄子

鴟の贄どっちつかずの空のいろ

風垣のうちでバス待ち贄成派

町長と同一年なり赤い羽根

海桐実に汐の匂ひの海女言葉

残る虫大箱燐寸使ひ切る

十二月八日の朝の素手素足

冬の蠅昨日の墨へ水を足す

寒海鼠よく考へてからのこと

畦焼くに上手下手あり火を放つ

本名を聞かれて春を惜しみけり

点線へ鋏を入るる目借りどき

落第の子がはっきりとものを言ふ

母屋築百年といふ猫の恋

牛の尻みがいて山の笑ひけり

74

一泊と三食付いて雪を搔く

身に添はぬ世辞とも赤き冬木の芽

涅槃西風大きな背中信じけり

75

鳥の巢一円玉を拾ひけり

占ひのはづれて烏蛇に遭ふ

誰か来て帰ったやうで雨蛙

土用東風母へ手頃な箕を一つ

生涯や峡の犬掻きしか出来ず

百足のまつり草鞋の荷が届く

筍の煮しみて新聞休刊日

目立屋の座して半畳吊忍

水打って思ひ違ひをしてをりぬ

78

誘はれて来て席題のかき氷

髪刈って田植すみたる顔で会う

髭を剃ることも養生雀の子

79

甚平やときたま当てにされてをり



何もせぬ声が混りて井戸浚へ

でで虫やきつくて一つ目のボタン

種茄子女の知恵を借りにゆく

燕去ぬ一筆箋の女文字

木の葉髪口慰みのひとつ歌

落雁にしめり気少し稲架日和

ほと祭馬刺を買うて帰りけり

干してある作務衣と現の証拠かな

あつてなきやうな兵歴菜虫とる

間引菜や話なかつたことにする

ふところの密書濡るるよ菊人形

穴惑ひ何時まで抜けぬ小吏癖

湯ざめして他人行儀なことを言ふ



隙間風日付替つてをりにけり

転け癖の妻へ手を貸す寒雀

股火鉢父の歲月疑はず

標をはいて頼りにされてをり

玉串をささげてふぐり落しかな

冬扇言うて置かねばならぬこと

酔海鼠の酔の効きすぎを詫びにけり

頼まれて搗く銀行の鏡餅

借りは借返して隙間貼りにけり

父親の授業参観風邪流行る

凍てゆるみなんにでも効く正露丸

持たさるる小銭が重し涅槃西風

初雷や佛具みがきの粉買うて

銭洗池に種銭小鳥引く

籤引いて決まるまつりの猿田面

段取りを考へてをり羽抜鶏

花冷や佛へ使ふ羽根箒

湯たんぽの湯を抜く返事待たれをり

山笑ふ芳名帳の外三名

苗札の芽が出揃うて茶碗市

残り苗買ふ長茄子か丸茄子か

することはしてからのこと種案山子

ごきぶりを潰せししっぺ返しかな

梅雨の蝶また出直して来ると言ふ

どこまでが内緒の話瓜の花

すぐそこと言ふ角曲る百日紅

秋日傘傾げて魚籠を覗かるる

言伝てのとどいて栗のおこはかな

買ひ置きのもをを買ひ足す敗戦日

捨案山子大きな月が上りけり

雁渡し梯子の脚にかませもの

鶏のついで走りや梅雨出水

嫁さんを貰ひし家の案山子かな



羽拔鶏つんぼ爺で通すかな

棋檯の実寝て起きてまた考へる

夕鴟や叩いて癒やすぼんの窪

紙を漉く紙が風邪引く話など

穴惑ひ昨日にまさる日和かな

少しづつものずらしては隙間貼る

着膨れてなかの 一つは 当り籤

爪染めてをり夜なべには加はらず

靴下にみぎとひだりと冬初め

尾花蛸提げ 尻さまとでつくはす

初紅葉 大きな切手貼りにけり

種なすび好き放題にさせておく

稻雀地図の折り目に現在地

風呂敷を四隅結びに寒卵

湯ざめして明日は妻の誕生日

水温む妻によく効く置きぐすり

口癖は惚けた惚けたとみがき盆

長老と呼ばれて羽抜鶏とゐる

かかはりの淡き訃新茶出廻りぬ

地虫出づ萌黄のいろの招待状

二三本ある筈棕櫚の蠅叩き

不器用なところよく似てはったいこ

山笑ふ書留で来る通信簿

蛇出づる去年の貸借なかりけり

鳥の恋単身赴任の巡査かな

梅漬けて女の黒子生き生きと

渋団扇時折りクイズ当たりけり

置き替へて壺の真贋暑気中り

法話いま終ったばかり土用灸

傍目にも夏風邪ばかりと思はれず

出来秋やそつとしておくものもらひ

遠雷や三里のつぼと言ふところ

田水沸く戸籍調べの巡査かな

菜虫捕るまだ晩年は手付かずに

田水沸く不在投票すませけり

梅雨の蝶さうゆっくりもしてをれず

噴水の高みて今日の運もらふ

何もないところですよと案山子立つ

走っても歩いてみても夕立かな

墨舐めてかしこくなりぬ秋の蠅

残る結び障子を貼って返しけり

鯛焼きの三等分のしっぱかな

かりがねやずしりと二十四万語

蓮の実が飛んで和服を着てみたし

三文判捺して午後にも蛇穴へ

借りて来し梯子とどかぬ神の留守

秋の蝶長居して母よろこばす

隼人瓜肩書なにもなかりけり



養生の酒は自分で温めけり

もともとは両手ん利きで木の实独楽

持ち出して煉炭火鉢きはるる

冬桜妻への借りは棒引きに

熱すぎてまたぬるすぎて春炬燵

代役ですます神事や春鴉

亀鳴くを聞いて前言撤回す

春の雁に問はれてみたる病歴

着膨れて拈華微笑といふ言葉

三月の水にほどけて縄束子

十二月八日温めて足のつぼ

髭剃ってあと爪切って冬日向

屋根替へて夜明が近くなりにつけり

返事まだ決めかねてみて田が植わる

忘れもの取りに戻りしサングラス

夏帽子いま鍵かけて出るところ

梅雨鴉囀んで含めるやうに鳴く

海へゆく山へゆく靴夏に入る

首へ吊る眼鏡夏負けしてをりぬ

水打つてみて大げさが嫌ひなり

明け方の夢があいまい父の日よ

捨子猫地蔵に借りを増やしけり

鴉の子ないものねだりして鳴きぬ

師系といふほどにはあらぬ春鴉

帰耕庵と掲げて葱の種を干す

棟梁が踊り櫓を組んでをり

洗濯へ放り込みたる夏帽子

藍浴衣着て襟足といふところ

手に負えぬ蔵の戸黄落始まりぬ

同じことけふもしてゐる神の留守

言ひ分の一つや二つ隙間風

柚子くれること誰彼に約束し

補聴器を外して風船かづらかな

にぎり酒一つ嚙をせがまれて

ゆくとまだ決めてはをらず麻の服

草笛のわれは海の子ばかり吹く

けふ留守にすること羽抜鶏にいふ

開くでもたたむでもなし秋扇

爪立ちて届く神棚鯨起し

手術せずすみたる冬の帽子かな

夕笹子妻が戻ってくる時間

牡蠣の鍋すんでに焦がすところかな

駐在の裏が見えたる泥鰯掘り

蓮の実飛ぶ日和を加賀の一の宮

雪だるまときどき居留守使ひけり

本当はかまって欲しい炬燵猫

隙間風内緒で一つ歳をとる

豆の餅仏の妻をよろこばす



くしゃみして仏の妻をおどろかす

マスクして一身上の都合ありぬ

帳箱に隠し抽斗春の風邪

犬抱いて引越してくる柳の芽



めつたには引かぬ殿さま蛙かな

白玉や思ひ過ごしをばかりして

梅雨の蝶出がけの用をことづかる

ついてゆく破目となりたる泥鱒鍋

青榎櫃妻がかぞへて納得す

雨蛙板戸一枚開けて留守

野辺送りすみたり雲雀揚りけり

寺家さまに貰はれてゆく仔猫かな

牛飼ひし父は入婿昭和の日

しもつけや仏の妻に借り多し

井戸替への大きな亀の子束子かな

葎障子入れて箆笥の位置替へぬ

貧乏で暇あり亀に鳴かれけり

立話長くて菜虫太りけり

落鮎や約束ひとつ反故にして

土用灸きんたる飴を貰ひけり

撃たれたく父が出てくる水鉄砲

井戸替へ神事のふどし姿かな

一クール了る療養水不足

夏痩せて大きな財布持ち歩く

あっぱっぱ苦労話を嫌ひけり

曲らうと太らうと秋の茄子かな

初鴈や指を絡めて反る運動

残り蚊や保証の印は妻が捺す

新米とはいつままでのこと零余子飯

黄落や三日にあげず仏の用

居合せた分の夜食をよばれけり

炬燵より出てゐる足を踏まれけり

遠縁に当る男の頬被

障子貼ることも世辞いふことも下手

手を振って歩幅定まる冬鷗

鯽起し少し遅れて零時打つ

粟おこしよばるる昼の酒も少し

箸袋廻して句会納めかな

喧嘩独楽教へし父はもと小吏

なるやうにしかならぬなり餅にひび

焼栄螺団体さんが着く時間

建国の記念日亡父の目出し帽

本当のことには触れず猫孕む

指のある靴下猟期果てにけり

初雷やほぐして癒やす土不踏

仕立物受け承ります猫の恋



櫓尻のくすぶるところ嬢座かな

雪代や写真の襟章星二つ

春炬燵ぬるければひとの口車



春落葉して大凡の暮し向き

ふだん着で地べたが好きで雀の子

干し笹に日付があつて鳥の恋

節電を呼びかけてをり夏雲雀

笏持って歩いて貰ふ滝開き

羽抜鶏こころ変りを訝かしむ

筍の煮しみ具合ひも其の他も

大旱の箆笥は悲鳴あげにけり

丸茄子太り過ぎたる苦労性

行きがてら田水盗んで来しことも

花冷えの烏骨鶏飼ふ男かな

水喧嘩身内のことに及びけり

振花のどちら振ぢりかそこまでは

穀つぶしてふ穀象の出るは出るは

梅漬けの種が大粒敗戦日

拘りは持たぬ継子のしり拭ひ

蛇穴にさして用なき日なりけり

勝手乍ら本日休業花八つ手

冬立つと酸素の足る日足らざる日

自然薯の蔓から教へねばならぬ

新松子天馬に轡鞍もなし

蚯蚓鳴きだまっつてばかりゐて疲る

でで虫や日銭かぞへてゐるところ

吊橋のお先をゆづる紅葉かな

着ぶくれて餡子の味のいまひとつ

着ぶくれてときたま大きなことを言ふ

まだ若いつもり豆餅焦がしけり

三月の了る折り線グラフかな

愛猫といふ程でなし孕みけり

ほどほどがよけれ蛙に目を借られ

雪間草大黒講の人出かな

時分どき誰かが言へり日向ぼこ

催促はしないつもり  
の桃の花

なささうなところも探し  
神の留守

言ひ訳にならぬ言ひ訳  
温め酒

春遠からじしよつづるの  
かくし味

お復習に遅れて来たる  
雀の子

鳥雲に鋏の楔の打ちどころ

これは扱て鉋の刃こぼれ花曇り

挿芽して大きな声を憚りぬ

梅雨の蝶足手まとひとなりにつけり

なめくぢらわたくしごとと断つて

あり体に申して父の日なりけり



結ひ返す代掻き牛を連れて来て

麦こがし見合写真を返しけり

いつからのものともあぶな絵を曝す

日蔭れば日蔭のいろの藪椿

頃合ひや乗つても見たき花筏

耳遠くなりたる分を朝寝せり

水撒いて否応なしの返事かな

梅雨の漏り急がぬものを探しをり

頼まれぬことの夜なべをうとまるる

孫娘に背丈越されて今朝の秋

案山子担ぎて挨拶をしてゆきぬ

夏痩せの足のしびれを託ちをり

夏負けや舐めて匂はす薄荷糖

今頃のあのころのこと子持ち鮎

蛇獲りと乗り合はせたりフリーバス

空耳に大きな返事梅雨の明け

膝の水抜かむ八月十五日

母のがり枡に足らねど早生の栗

冬構そこ動かせぬ石一つ

神留守や梵字一文字石の杭

時分どき焚火を育て棟梁たり

歳晩や人手を借りる大梯子

湯ざめしてをり補聴器の具合など

用といふ程でなけれど一葉忌

挨拶は先づ着膨れて来しを言ふ

蟄居して板戸一枚外の冬

芋羊羹亡母の話が先に出て

辞儀深き手に貼り葉十夜婆

約束は半端な時間神の留守

桶の箍弛んでをりぬ鯰起し

封緘の糊代舐めて風邪心地

定年や寒竹の芽が一二寸

山笑ふベッドの上の鉄亜鈴

箸休めなりけりまはす花菜漬け

初雷や立った序での母使ふ

目立屋へ内弟子が来て山笑ふ

髭面やザツク一つの新社員

コンセント一つ空きたる芽木明かり

出稼ぎは大吟醸の杜氏たり

焼印の屋号一文字海鼠桶

預けある年金手帳水温む

前書も後がきもなく亀の鳴く

春暁や猫と話をしてをりぬ

乗り遅れ乗り遅れして花筏

傍目にも陳腐な父のアロハシャツ

なけ無しの母の年金夏落葉

梅雨夕焼また明日会へるやうに逝く

でで虫や答へて百のアンケート



妻なしの田植布子の踏み洗ひ

遅れ馳せながらの文で梅雨に入る

母がりや茄子の花など長けたれど

白玉や甘え上手に老いてけり

麦笛や陸軍歩兵一等卒



かかはりは仔猫ゆづりしだけのこと

似合ひても似合はなくても登山帽

予後なりきシャワー使へば夜の秋

よく転ける父朝鴉に夕鴉に

稲架たたむ音の能登島日和かな

雁渡る頃の虚空や禅の里

板戸きしんで木犀の香なりけり

妻なしの洗濯日和神の留守

風邪の神句帳覗いてゆきにけり

早稲の香や二つ返事の保証印

つづれさせ昔大工の道具箱

草枯れて草の匂ひの月上る

どれどれと父が加はり独楽叩く

海鼠に酔効かせ似たもの夫婦かな

駅裏はねんねこの町パン買ひに

皇紀二千六百年のさくらかな

春の雲ミンチ工場の赤煉瓦

約束の仔猫貰はる地震のあと

身ぐるみの体重測定桃の花

何探すともなく探しあたゝかな

畦焼いてその日の匂ひ妻にあり

水洩や門下と言ふもをこがまし

猫の子のぞろぞろ国勢調査かな

言葉尻ひろはれて居る春の風邪

烏の巣売薬さんが通りけり

握力の左が勝るめかり時

喪の什器人来て洗ふ桐の花

優曇華や大きな声をたしなまる

遣り繰りの下手な分だけ茄子太る

小犬の名ロンドとハリー冷房中

早苗饗の夜より始む稽古獅子

ひらひらと尻さまが往く水飢饉

羽拔鳥びた一文も出さぬなり

吸い呑みが転がってゐるはたた神

水番が謝ってこと治めけり

釘箱の中の折り尺昭和の日

またの名を妻が知りみて夕化粧

防災の日の踏切の向う側

追っ付けてひよ来る板戸繕ひぬ

蓮の実が飛んで和服の父のこと

松籟にまざる人声茸山

放屁虫にも本当の名ありけり



言葉つつしむ木犀の香なりけり

小判草の種採つてゐる地獄耳

降れば降つたときの山芋掘りにゆく

実の榎櫃目鼻画けば卒寿かな

芋莖干す切妻の影通りすぎ

あたたかき十一月の爪を切る

# 句寿夫さん

SHUNSUKE SUZUKI

定梶じょう

大正十五年生れの句寿夫さん、満年齢九〇で逝かれたわけです。現在の社会環境ではびつくりするような高齢とはいえないかもしれないかもしれませんが、ともかく脳年齢は亡くなる際まで実にしっかりしていたのでした。

〈有難う。別れの時が来たようだ。世話になった人によろしく〉。  
枕もとに、身内へのことばを遺して。

## 分校の生徒いま着く運動会

いつ頃の作か御本人もはつきりし得ない句。

昭和二〇年の敗戦で除隊、復員した句寿夫さんが、近隣に住む先輩の徳憑で句作りの世界に入るわけですが、初めからしっかりした句を作っていたのでした。やっぱり俳句に携わっていて句寿夫さんと同齡の私の長兄が、『いま着く』の措辞が何ともいとおしい、と評したのを思い出すのです。

細野家に生れた句寿夫さんは、やがて弟子徒弟を大勢つれ抱える棟梁の中川家へ婿入ります。奥様の安子さんは近隣でも端麗なことで知られていた方でしたが、先立つこと十年少し前。その血は中川家の長女久美子さんが色濃くうけついでいるのです。

昭和三〇年までのその俳歴は、『くらげ』という俳誌に所属していた、

ということしか私は知らない。資料を残していないし話も聞いていない。当時の俳名は『久寿夫』でしたが、『くらげ』をやめたあとは地元紙の新聞投句で名をなすこととなります。

新涼やネクタイしめて人に会ふ  
檜炭の俵の蓋は檜の枝  
鳥渡る村を輪島のお膳売り  
炭がまに忌明けの塩を振って入る

風土色の強い句群ですが、当時流行の『風土俳句』にのつての作ではない。住まっている近辺を詠めばいやでもこうなる、ということ。地元の句会ではあまり理解されない数年が続き、やがて『風』誌に入会。名も「句寿夫」に変えて少し元気が出てきた頃です。でも、その『風』

誌に載った句群の資料が一切ありません。その頃の新聞投句を参考に何句かを。

朝市に売る楽しみの大根洗ふ  
ぜんざいも出て分校の雪下ろし  
初霰牛飼ひが来て納屋覗く  
春昼を尋ねし留守の時計鳴る  
竹藪に日輪淡し穴まどひ  
雪の戸を余さず廻る刃物売り

特に「春昼を」は、私が俳句を再開して間なしに句会で出あった作品。驚いた記憶があります。

やがて『風』をやめた句寿夫さん、『雲母』に入会、『雲母富山句会』

に所属することになります。とともに、嘩然とするほど、いわゆる『雲母俳句』に同化してゆくのです。

鶯が鳴く縹渺として数へ年  
朴の芽がほぐる童話読むやうに  
ただよへるもの白壁の今年竹  
父看取る更に遠くの夕蛙  
竹林に入りて万の目しじみ蝶  
秋燕動かぬ山を縦横に  
新涼の群を離れて真鯉かな  
雪解川自足の母に音立てて

『雲母』終刊の何年前でした。私の経営する企業が傾いてきて

句に割く時間がなくなってきました。私に同情して句寿夫さんも『雲母』を退会。数年の刻を経て、地元での超派閥的句会の仲間の誘いで『寒雷』系の『麓』に入会、すぐに同人に迎えられます。当時私は大阪に住まっていたので、それでも始終連絡はとりあっていました。『寒雷』系統の句柄を好まないこと知っていた私は、いつまで我慢できるだろうか、と。

九年間の在阪生活から帰郷した時、細川加賀（晩年を石川県小松市で過ごしていました）の最後の句集『玉虫抄』を持参して句寿夫さんに見せたのです。

蛇 苺 すこし 歩いて 蛇 苺                      細川 加賀

長 崎 はちん ちん 電車 花 曇

窓 といふ 窓 に 雪 降 り 版 画 展

いちはずや夢二のをんな眠たさう  
天ぶらを食べそれからの日永かな

その主宰した『初蝶』は当時、小笠原和男さんが継承してましたが、句寿夫さんは即座に『麓』をやめて『初蝶』に入会。それが平成十六年だったか十七年だったか。この文章を書くために当主の節志さん御夫妻の手を煩わして資料を探して貰ったのですが、『初蝶』は残っていただけど『麓』誌がものの見事に一冊も残っていないのでした。句寿夫さんの遺した短冊色紙より何句かを。

群がって一本づつの曼珠沙華  
甚平や死に損なうてをると言ふ  
朝刊が来てそれからの雪の嵩

鶯餅つかみどころのありにけり  
河骨の花見るただそれだけの用  
出穂はや倒伏ところどころかな  
鰯雲能登も広しと思ひけり

『雲母』を私とともにやめて、何年間か『俳句懇話会』なる超結社の句会に入りましたが、その頃の句群。

寒鯉のゆらりと水に戻さるる  
身を細う細うして秋の蛇なりき  
地下足袋の靴きっちり花石榴  
冬耕の明るき方へ方へ雲  
初蝶や葉で顔のほてる日の

屋根替へを今年本気で考へる  
木を伐って瀧を裸にしてありぬ  
海老根群生告げやうか告げまいか  
色足袋や生涯妻のここのもん

『色足袋』の句を、あなたの代表句だ、と言いましたら当時病んでいらした奥さまのことを思われたのでしょうか。複雑な表情をなさったのでした。

句寿夫さんの実際の作句数はこの句集の、多分何倍にはなろうかと思いません。しかし先に述べました通り、『くらげ』時代のものは全く残しておりませんし、その後の『風』誌も同様。そのあとの『雲母』の時代は辛うじて私が書き留めてあった十句足らずが知られるのみ。私自身『雲母』誌を遺していません。

『俳句懇話会』発行の合同句集『啐啄』が何冊か残っていて、ここから四〇句ほど拾うことができましたが、そのあとの『麓』誌を一冊ものこしていないのは先に記した通り。

『初蝶』をやめ『あを』誌に出句するようになって一年足らず。あっという間に逝ってしまわれたのでした。



句集 このもん

発行日 2017年5月1日

著者 中川句寿夫

発行人 中條久美子

中川 節志

編集 定梶じょう

カット 松村美智子

発行所 竹僊房

東京都中野区中央2-50-3